

課題名：インクルーシブな仕事を通じた認知症共生社会作りの研究

代表機関／代表者：東京都健康長寿医療センター研究所／岡村毅

分担機関：大正大学、京都橘大学

研究期間：令和5年12月～令和8年3月

研究開発目的

- 日本の認知症予防研究は優れたエビデンスを出してきたが、共生研究はまだ十分なエビデンスを出せていない。
- 世界的にも共生のエビデンスはほとんどない。
- 理由は、第一に、共生のデータは複雑、ナラティブ、多元的であり、生活の中にあるからだ。第二に、認知症があっても病院で診断されていない人の方が多数派であり、医療機関だけでは研究ができないからだ。

取り組み

- シフトなし、ノルマなし、年齢制限なし、経験不問をすでにリアルワールドで補助金なしで実現している先進事例がある。
- 共生とは、若者のように生きることでもなく、福祉の支援を受けることでもなく、他人の為に役に立つことを含むと考える。
- ①参与研究を行い、②フィージビリティスタディを行い、③ランダム化比較試験を行い、④社会に広める。

成果

- 働き手に悉皆インタビューを行い、ナラティブを分析した。（上記①）
- 認知症と生きる人3名に、実際にその職場で働いてもらうフィージビリティスタディを実施した。（上記②）

今後の展開

- ランダム化比較試験を実施する。（上記③）
- 全国で同様の取り組みができるようにノウハウを可視化する。（上記④）
- 一部の極めて優れた高齢者の就労と、福祉的就労（デイサービスなど）の間に、新たなウェルビーイングな労働市場を創造する。

フィールドの様子



ナラティブ分析の結果

シフトなし、ノルマなし、年齢制限なし、経験不問の職場で働く高齢のかたは・・・

- ① 稼働層と同条件で働くことは困難と感じている
- ② 仕事を探す中で年齢を理由に理不尽な断られ方をされるなどの経験から労働市場から撤退
- ③ 社会福祉の支援を受けたいとは思っていない
- ④ 働くことで自尊心が回復している
- ⑤ 仲間づくりや暇にならないことが大きな報酬（67名のインタビューから）